

受賞者： 農事組合法人 みや もり がわ じょうりゅう 宮守川上流生産組合 とお の し（岩手県遠野市）

受賞年
平成23年



むらづくりの経緯

- ・宮守川上流地域は、遠野市北西部の中山間農業地域に位置し、小区画ほ場が8割を占めるなど農業生産環境が厳しく、高齢化が進んでいた。
- ・このため、平成3年度に農村整備事業推進委員会を組織し、平成6年度から基盤整備を実施。推進委員会にて今後の地域農業のあり方について議論を深めた結果、3集落が一体となって非効率な零細自己完結型農業から脱却し、「一集落一農場」構想の集落営農を目指すことで合意
- ・この構想実現に向け、平成8年度に「宮守川上流生産組織(任意組織)」を設立、平成16年度に組織目標の明確化と事務管理体制の強化を図るため法人化

受賞当時

生産活動の特色 (営農活動、加工事業)

- 一集落一農場の実現に向けた体制整備
 - ・毎年総会で目標を共有し、6部会、1加工所、1グループ体制で集落営農を効率的に展開
- 効率的農作業による規模拡大
 - ・農作業受委託、ブロックローテーションによる大豆の集団転作に取り組み、機械稼働率向上を図っている。
- 女性の活躍による6次産業化の推進
 - ・直売所、加工所の設置により6次産業化に取り組み、加工品の製造販売には女性が欠かせない存在として活躍
- 後継者の育成・確保
 - ・若い組合員をオペレーターとして雇用、安心して働ける保険制度等を整備し、後継者育成を実施



地域づくりの特色 (部会活動)

- 直売所を核とした地域づくり
 - ・地域住民や近隣集落の人が楽しめる各種イベントを企画開催
- 自然環境を活かした地域づくり
 - ・推進委員会に女性を中心とした「環境部会」を設置、景観形成活動を展開
- 水辺の環境保全活動
 - ・農家以外の住民も参画する「宮守川上流友の会」と連携した環境保全活動を積極的に展開
- 新規作物の導入による地域活性化
 - ・わらびやブルーベリーを導入し女性や高齢者の雇用創出を実現

～受賞直後の効果～
・農業者団体、市町村などの視察が増加 等



現在(令和4年)

評価ポイントの取組状況

- 農事組合法人の組織を2部(営農部、加工部)、4部会の体制にするとともに、中山間直接支払について隣接の迷岡集落と広域連携
- 効率的農作業による規模拡大
 - ・組合の管理田が年々増加。水稻について令和3年度に県のリモートセンシング実証に協力し生育改善技術を検討。また令和2年度に畦畔の草刈りの省力化のため、ラジコン式草刈機を導入し省力化図る。
- 女性の活躍による6次産業化の推進
 - ・加工所に濁酒(どぶろく)製造場を開設(H26)し本格販売を進めるとともに、自社および地域産農産物を使った製品(ミニトマト、ブルーベリー、ヤマブドウなどのジュース、ジャム等)への加工を実施。地域内外からの農産物加工受託も増加し、女性が中心メンバーとして活躍
 - ・コロナ禍の売り上げ減の対策も含め、専門家も入り、加工部・産直部会で改善策を検討
- 後継者の育成・確保
 - ・営農オペレーターの役割・目標を定め、技術・能力向上に取り組む。併せて加工部門では、若い職員の人材育成(社員研修)を実施。
- 環境保全活動
 - ・地域の水田が令和3年4月に指定棚田の認定を受け、これまでの水辺の環境保全活動と併せて、地域の棚田の保全活動も推進

今後の展開

- 地域の農地を守り、持続可能な地域農業の振興を図る。
- 産直や開設したECサイト(組合独自)も有効活用を図り販売増を目指す。
- 加工品販売を含めた農業振興と環境保全活動の取り組みにより、地域振興を進める。

受賞者： 奥能登春蘭の里実行委員会

(石川県鳳珠郡能登町)

受賞年
平成23年



むらづくりの経緯

- 能登町を含む能登半島地域は、平成23年日本で初めて世界農業遺産に認定された地域であるが、中でも奥能登春蘭の里実行委員会が拠点としている宮地・鮭尾地区は、町内でも最も高齢化率が高い、過疎化の進む集落であった。
- ・平成3年頃から、会社員、建設業、林業等の異業種の有志7名が地域活性化に向けた協議を重ね、平成8年に「奥能登春蘭の里実行委員会」を設立した。
 - ・集落全体の合意形成から始めるよりも、「まずやれる者から始める！」というスタンスで活動を開始し、徐々に参加者、協力者を増やしていった。
 - ・雄大な自然の恵みが溢れるこの地域の魅力を活かすため、地域資源「春蘭」の花に地域活性化の夢を託し、「春蘭の里構想」を策定した。

受賞当時

生産活動の特色

- 「春蘭の里」の商標登録を取得し、「はざ干し米」、清酒「春蘭の里」、「木工品」、山菜、林産物等の製造・販売を開始。地元スーパー等とも取引を始めるとともに、地元農産物を定期的に届ける「春蘭の里会員制度」を導入した。
- 農林産物の生産と販売を行う「春蘭の里ファーム」を設立し、国営農地開発地を共同購入し、周辺の山林と合わせて「きのこ山」として整備を行い、民宿への食材提供や収穫体験等に活用。
- 総菜製造業及び菓子製造業の許可を取得し、(農)のと夢づくり工房を設立。わら製品、農産加工品の製造、直売所の運営を開始した。また手作りの培養土や腐葉土を野菜作りに活用し、有機JASの認証を受けた。

地域づくりの特色

- 「春蘭の里構想」に基づき、農林産物の高付加価値化から始め、地域全体を観光森林、観光農業としての林農事公園として、都会人の郷愁を誘うようなむらづくりに取り組む。
- 農家民宿第一号「春蘭の宿」は、昔ながらの農家の佇まいを残し、地域の伝統的な料理を提供するほか、様々な体験参加型のメニューを構築し「こだわり」という付加価値をつける。1軒から始まった農家民宿は、隣接地区まで拡大し、平成23年には、30軒(200人/日受入)になり、修学旅行やインターンシップの受入等を地域全体で取り組み始めた。
- 廃校になった小学校を、体験・宿泊交流施設「こぶし」として整備し、積極的な都市農村交流に取り組んでいる。

～受賞直後の効果～

- ・海外メディアでも取り上げられ、海外からの来訪者が増加
- ・外国人ユーザーが農家民宿体験動向を多数UP



- ・実行委員会のメンバーの増員
- ・農家民宿の増加により、春蘭の里の活動地域が、能登町、穴水町、輪島市、珠洲市にまで拡大し、1日に多くの人を受け入れることが可能になった



- ・地域特産物の売上げが増加し、販路が拡大した



現在(令和4年)

評価ポイントの取組状況

- (一社)春蘭の里を設立し、(有)春蘭の里ファーム及び、(農)のと夢づくり工房の運営を担い、農林産物の生産と販売、総菜及び菓子製造、直売所を一括で管理。春蘭の里会員制度は廃止したが、巣籠需要や地域の高齢化を鑑み、お弁当の製造と配達を開始し、約10軒のスーパーでも販売。
- 春蘭の花は、鑑賞のみではなく、食用に冷凍し、京都のお茶屋へも出荷。
- 「きのこ山」は、定期的な手入れを継続し、きのこ狩り等の体験メニューとして毎年好評をいただいている。
- 農家民宿は、オーナーの高齢化により、毎年、新規開業5軒を見込めないと成り立たない状況ではあるが、現在47軒にまで増加させ、1日の受入れも350人が可能となっている。
- コロナ禍ではあるが、都会からの修学旅行生が年間2,000人訪れ、自然体験や農家の暮らしに触れ、都市農村交流は継続。
- 春蘭の里金沢会やNPO法人ジェスタ(東京)とも連携し、毎年、むらづくりの担い手となる若者が訪れ、現在、I.Uターン者は12名となっている。
- 若者が、農家民宿の経営をしながら、カフェやバー&サウナ、ピザ屋、コインランドリー(経営:春蘭の里)を事業展開している。

今後の展開

- 「若い世代の定住・赤ん坊の泣き声が聞こえる‘むら’をつくり、農家民宿で月収40万を目指す！」ことを謳い、春蘭の里にあらゆる機能を持たせ、1つのコミュニティ(コロニー)を形成するため、若者やよそ者、行政と協力しながら、新たな取組を行っていく。

受賞者：久富木区公民館

(鹿児島県薩摩郡さつま町)

受賞年
平成23年

日本農林
漁業振興
会会長賞

むらづくりの経緯

・久富木区は、さつま町の南端(旧宮之城町)に位置し、薩摩川内市と隣接する5集落・人口約700人(約300世帯)の地区。水稻、たけのこ、畜産等が盛ん。
・昭和の後半に小学校分校が廃校となり、鉄道駅も閉鎖され、過疎化・少子高齢化と相まって住民に閉塞感が漂う中、平成5年度に、県の「新・農村振興運動」を活用して地域活性化に取り組むことを決め、話し合いを開始。平成7年度に「みんなで考え、みんなで興し、みんなで拓くむらづくり」を合言葉とした「久富木地区地域づくり活性化計画」を策定。この計画を基に、住民の約3分の1(約90名)が区会議員としてむらづくり活動に参加するなど住民総出で多彩な活動を展開。

受賞当時

生産活動の特色

○田植え・稲刈り等の稲作作業を受託する農作業受委託組合を設立し、平成23年度に約20haを受託。

○早掘りたけのこの振興のため、生産者組織による定期的な話し合い活動や研修会等による技術向上を図り、県林業技術協議会で最優秀賞を受賞するなど優良産地を形成。

○平成18年度に直売所「べっぴん市場」を開設。レンゲを緑肥として鋤き込んだ減農薬米「久富木れんげ米」や新鮮な野菜、米菓子「むらおこし」等の加工品等を販売。当初約30名であった出品者は約40名に拡大。



「べっぴん市場」外観とそこで売られる「久富木れんげ米」「むらおこし」



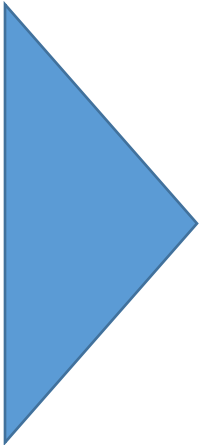
地域づくりの特色

○子どもから高齢者までが参加する久富木川源流ウォーキング大会、公民館で毎月1回ふれあいサロンの実施をとおして、地域住民新たな絆、愛郷心づくりを行う。

○道路清掃、桜の管理等の共同作業活動が持続するように、活動に係る各自の費用を、地区内の「べっぴん市場」等で利用できる地域通貨「ユイ券」で還元。

～受賞直後の効果～

・受賞直後に開催したウォーキング大会にはTV取材も入り盛会となった。



現在(令和4年)

評価ポイントの取組状況

○農作業受託組合は、約23haを受託(R3)。また、平成28年に飼料用米生産組合を結成し、飼料用米を生産していたが、現在はすべてWCS用稲へ転換している。
○早掘りたけのこの生産は、竹林現地研修会の開催等により生産技術の向上を図るとともに、TV取材等を通じて産地情報を発信。
○「べっぴん市場」の出荷者は約50名、年間500万円を売り上げ、地域経済の活性化に貢献するとともに、高齢者の生きがいの場、地域の交流の場として機能。
○久富木川源流ウォーキング大会は、史跡を巡りながら歩く大会として毎年開催していた。現在は毎年1月に区内の4神社が合同で史跡を巡回後、区の公民館で異世代間の交流会が行われている。
○ふれあいサロンは、毎週火曜日に町が奨める体操を中心に実施。高齢者の交流と、健康への意識向上を図っている。
○地域通貨券「ユイ券」の発行も継続され、「べっぴん市場」や区内の精米所などで利用でき、住民間でも広く浸透している。



史跡巡りウォーキング大会の様子



ふれあいサロンで健康体操

今後の展開

○引き続き、WCS用稲の生産など水田のフル活用に取り組むとともに、「べっぴん市場」への農産物出荷等を通して、高齢者の生きがいづくり対策、地域住民の交流活動などに取り組む。